

沖縄地理学会巡検

那覇市田原の都市と自然 ——米軍基地返還地周辺の景観

開催日時：2014 年 2 月 22 日（土）14：00～17：00

案内者：渡久地健（沖縄地理学会会員）

主要関連文献：渡久地健（2012）「田原の自然」、田原字誌編集委員会編『田原字誌』、字田原財産管理運営会発行、pp. 13-39

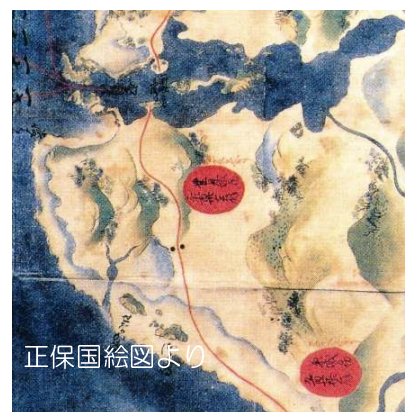


図 1——1945 年（昭和 25）1 月，米軍撮影。那覇上空から南方を望む。奥武山とガーナムイは漫湖に浮かぶ小島だった。手前は旭町・泉崎・楚辺・壺川



図 2——南明治橋（戦前）。奥武山や「後（クシ）ヌウタキ」の主要植物はリュウキュウマツ



図 3——終戦直後の《ムイ》または《モー》と呼ばれる小丘と《カー》と呼ばれる井泉の分布。小丘の分布は GHQ 地形図（1948 年作製）による。井泉は現地調査ならびに那覇市史編集室作製「那覇の歴史民俗地図」による。ピンク色の線は田原（字田原，田原 1 丁目～4 丁目）の範囲。道路は現在のもの。「根神小毛」は「ニーガングウモー」と読む



図 4——「ウーチジ森（ムイ）」から「後（クシ）ヌウタキ」と「トウムイ」を望む

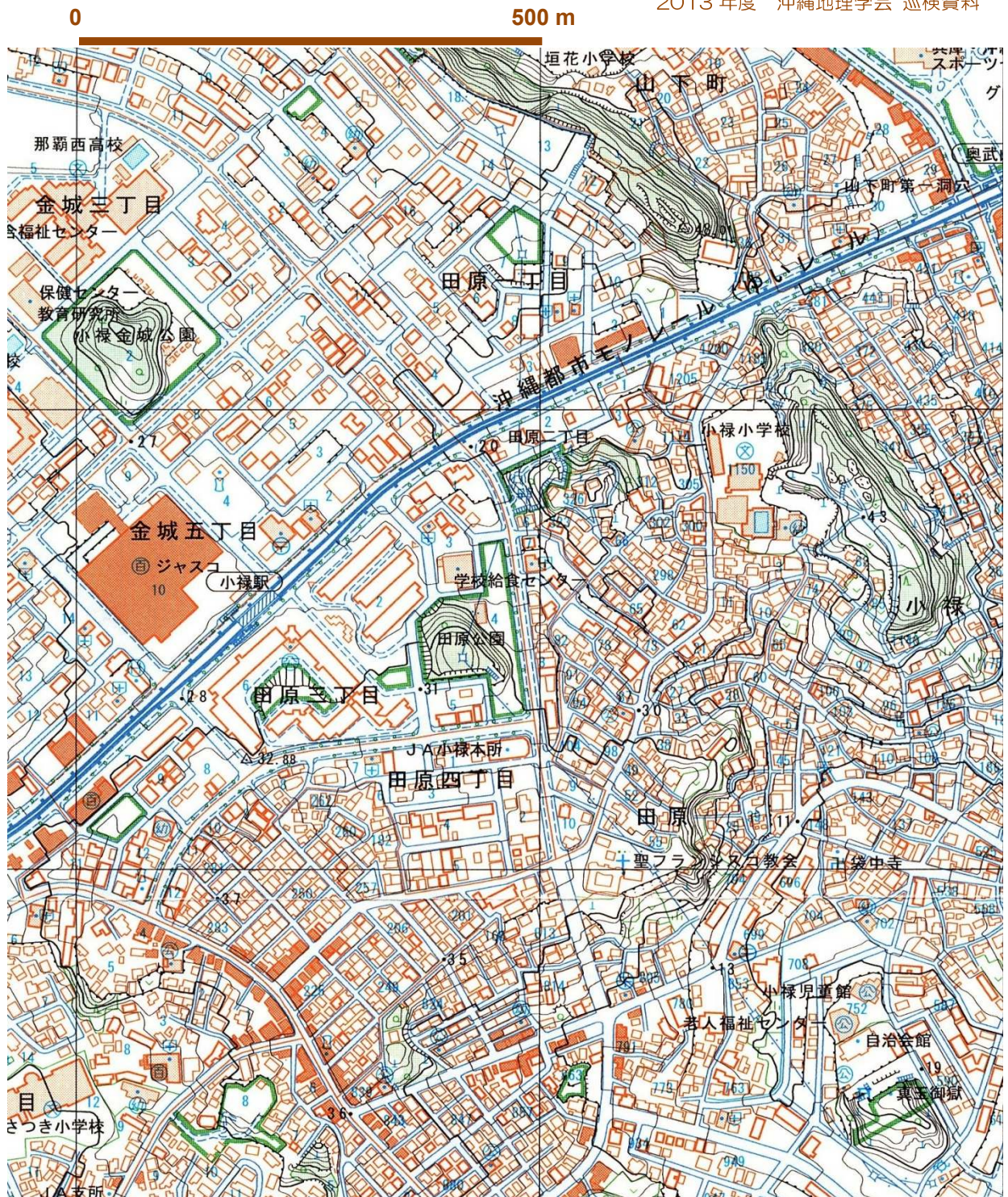


図5——1万分の1地形図「那覇」(2005年4月, 国土地理院発行)の一部。約1.3倍に拡大。メッシュは500m×500m



図6——造成中と造成後の「新部落」。那覇市歴史博物館提供

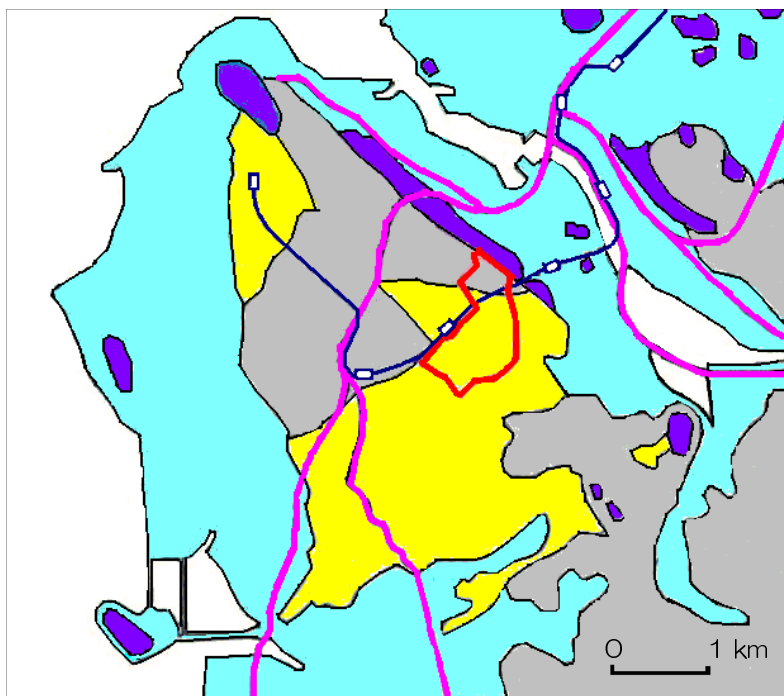


図7——表層地質図。古川博恭・神谷厚昭・祝嶺梨枝子（1983）「表層地質図」、『土地分類基本調査（沖縄本島中南部地域）』（沖縄県発行）による。黄色：島尻層群・砂岩（ニービ），灰色：島尻層群・泥岩（クチャ），紺色：琉球石灰岩，水色：沖積層（埋立地を含む）。赤線で囲まれて部分が田原

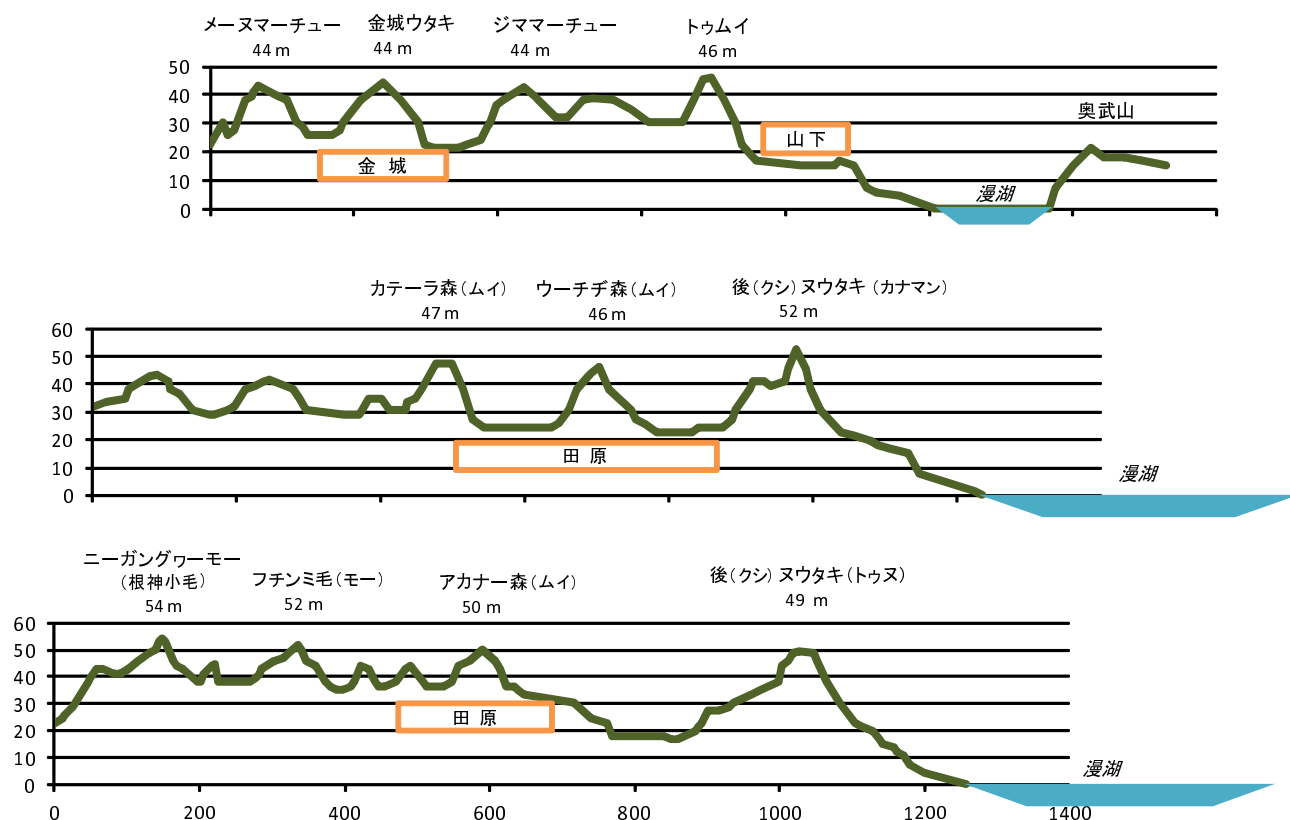


図8——地形断面図。1948年作製のGHQ地形図により作成。GHQ地形図は標高をフィート(ft)で表しているが、本断面図ではmに変換した(1ft=0.3048m)。国土地理院の最新のデータ(「電子国土ポータル」など)と照合してみたが、誤差は小さい。丘の頂上の高度は40数m, または50m前後で、定高性が認められる

● 地形と水——ムイ（丘）と繋がっているカー（泉）

『田原字誌』編集委員長の上原勝男氏をまじえて、大正 15 年生れの上原ハツさんと昭和 6 年生れの高良ミヨさんにお話をうかがったとき、「クサイヌカー」という意味深長な言葉に接した。ムイ（丘）とカー（井泉）の関係を考える上で、たいへん示唆的なので、会話の一部を紹介したい。

——子どものころによく遊んだ場所はどこでしたか？

ハツ 自分の家の近くにあるカーグーウイ（川小上）、井戸、クムイの上のヤマです。

ミヨ タキグサイヌカー（の上）ですね。

勝男 アカナームイというウタキ（御嶽）があるが、そのウタキのモー（毛＝原野）の下には、水汲みをしたり、手や鍬を洗ったりするタキグサイヌカーという井戸、湧き水がある。

ミヨ カドゥグー（角にある井戸）はクガニヌクサイヌカー。また下のほうはヒヌカン。

勝男 ウタキ、ヤマがあると必ずその下には井戸（カー）がある。その井戸をクサイヌカーというのです。

——クサイヌカーは、ウタキのクサ（背後）のカー（井戸）という意味ですか。

ハツさん クサイは「繋がりがある」という意味です。

ミヨ 「一緒」という意味でしょうね。

勝男 語源はわかりませんが、ウタキとなるヤマ（丘、ムイ）があれば、必ずそのウタキとセットになって井戸（カー、湧き水）がある。

ハツ （ウタキとカーは）繋がりがある。

ミヨ （ウタキとカーは）セットになっている。

この会話から、丘（ムイ／モー）と井泉（カー）は密接な関係があること、人々が両者の関係をはっきりと認識していることが明らかである。

● 土地の「歴史〈時間〉」が「空間」化された集落パターン

那覇空港は、もともと昭和 8 年（1923）に旧日本軍によって建設された小禄海軍飛行場であった。同飛行場は、太平洋戦争末期の昭和 20 年（1945）6 月に米軍に占領された。そして、飛行場周辺は、米軍基地に接収された。現在の航空自衛隊施設は米軍基地を継承した基地である。米占領下の基地建設のために、田原の北半分が接収された。また、集落全域を接収された大嶺・安次嶺・当間・金城・鏡水・赤嶺の各字の住民は、周辺地域に移住することを余儀なくされた（『沖縄県の地名（日本歴史地名体系 48）』参照）。そのため、昭和 28 年（1953）に、土地組合を結成し、字田原と字小禄にまたがる約 12 ha の土地にいわゆる「新部落」を建設し、約 500 世帯が移住した。米軍基地の多くは復帰後、航空自衛隊施設に編入されたが、昭和 55 年（1980）3 月に大規模な返還がなされた。その返還地には新たな都市計画によって、大規模な商業地と住宅地が建設され、都市モノレールが通る那覇の大都市の 1 つとなり今日に至っている。

この激動の土地の歴史は、那覇空港に降りモノレールに乗り換え、まもなく視界に入ってくる赤嶺・金城・田原一帯の町並みを眺める観光客には気づかれることはないだろう。しかし、現在の田原（字田原、田原 1 丁目～4 丁目）の中には、その歴史＝時間が空間化されている。つまり、現在の田原の集落・道路パターンのなかに 3 つの相の土地の歴史が織り込まれている。

戦後の土地利用の変化とともに田原の自然も大きく変化した。都市化によって、農地が減少し、またかつて多く見られた小丘（ムイ）の多くが消失し、緑地が減少した。井泉（カー）や池（クムイ）の一部も埋め立てられた。しかし、クガニームイは以前と同じで、ウーチジモー（別名：アカ

モ—またはアカムイ) やカテーラムイ (ことぶき山) は、裾部が大きく削剥されたものの、それぞれ「デイゴ公園」, 「田原公園 (ことぶき塚)」として残されている。

奥武山公園駅から小禄駅に向かうモノレールは、2 つの大きな緑の丘——トゥムイと後ヌウタキ——の間を駆け登っていく。やがて、左手 (南側) に、ウーチジモ—とカテーラムイの丘が視界に入ってくる。これらの丘は都市の中に残された貴重な自然であり、ムイの点在する小起伏丘陵地としての田原の歴史を育んできた原風景を思い描く縁である。

表 1——田原周辺の丘の植生 (2011 年 4 月, 渡久地調査)

場所	主要樹種 (下線は比較的多く見られる種)	備考
(1) トゥムイ (田原 1 丁目の北東部)	オオバギ・イヌビワ・ <u>ハマイヌビワ</u> ・シマグワ・ヤブニッケイ・アカギ・シャリンバイ・アカテツ・トベラ・ハゼノキ・リュウキュウマツ	リュウキュウマツは少ない
(2) 後ヌウタキ① (小禄小学校の北東)	オオバギ・ヤブニッケイ・ <u>ハマイヌビワ</u> ・アカテツ・アコウ・チシャノキ・リュウキュウマツ・ゲッキツ・ハゼノキ・オオムラサキシキブ	リュウキュウマツが散見できる
(3) 後ヌウタキ② (大里門中臺の背後)	<u>ハマイヌビワ</u> ・ヤブニッケイ・ガジュマル・モクマオウ・ <u>ソウシジュ</u> ・ <u>クロヨナ</u> ・ <u>オオバギ</u> ・ハゼノキ・シマグワ・チシャノキ・ナガミボチョウジ	琉球石灰岩が分布する。ソウシジュ・モクマオウは外来種。ナガミボチョウジは低木
(4) 後ヌウタキ③ (カニマンウタキ付近)	<u>クロヨナ</u> ・ヤブニッケイ・ <u>オオバギ</u> ・チシャノキ・ハゼノキ	琉球石灰岩が分布する
(5) 後ヌウタキ④ (トゥヌ付近)	リュウキュウマツ・ <u>オオバギ</u> ・ハゼノキ・イヌビワ・ギンネム・オオバイヌビワ・クチナシ・ヤブニッケイ・シャリンバイ・アコウ	草本のゲットウも散見される。ギンネムはが痛い種
(6) ウーチジムイ① (東側斜面)	イヌビワ・オオバギ・ハゼノキ・アコウ	丘の周辺は墓地。丘の頂はコンクリートで被われる。公園化によって斜面の一部にはコンクリートの階段が設置されている
(7) ウーチジムイ② (北側斜面)	オオバギ・ <u>アカメガシワ</u> ・ <u>ハゼノキ</u> ・アカギ・オオシマゴバンノキ	
(8) ウーチジムイ③ (西側～デイゴ公園側)	リュウキュウマツ・ギンネム・モクマオウ・トベラ・アカギ・イヌビワ・ゲッキツ	
(9) クガニームイ① (登り道の東側)	アカテツ・ヤブニッケイ・オオシマゴバンノキ・クチナシ・イヌビワ・チシャノキ・トベラ・ネズミモチ・シマグワ	
(10) クガニームイ② (頂上)	ハマイヌビワ・ガジュマル・トベラ・ヤブニッケイ	



図 9——沖縄島中南部の森林植生 (ナガミボチョウジ—リュウキュウガキ群団) の標徴種
a: ナガミボチョウジ b: リュウキュウガキ